

# 乗越の風

「乗越」(のっこし)という言葉を知ったのは、北アルプスの山に登り始めてからのことだ。一方の谷からもう一方の谷へ越える山稜の鞍部、すなわち峠を「乗越」という。常念乗越は、松本市側の一の沢の谷を登り詰めた横通岳と常念岳の鞍部にある。この乗越の向こうは上高地の谷だ。一九九八年八月二日に私はこの乗越(標高二四五〇m)に立った。その頃は運動不足で体力がなく、登山口から五時間もかかりヘトヘトに疲れていた。その上どうやら高山病状態で愛煙家を自認する私も、さすがにタバコを吸う気になれなかった。しかし、乗越の冷たい風に励まされるように立ち上がり、撮った一枚がこの写真である。

絶えず吹きつける強風のため、左に傾きながらかるうじて杖を伸ばす樹木は岳樺(ダケカンバ)である。恐らく常に同方向からの強風を受けて、このような樹形になるのだろう。痛ましくもあり逞しくもある。



この日、沢を歩くとき小雨が降り、気温も湿度も高く、雨具を着た私は大汗をかいた。しかも沢の道は無風状態だった。山には風の道と無風の場所があり、極端な差があることを私は改めて知った。蒸し暑さと疲労のため私は何度も休憩した。何度目だったか、倒れ込むようにして水場の岩に座った私は水を汲みに行く元気もなかった。ところがそんな私を尻目に、一人の老人が傘を手にヒョイヒョイと岩を駆け上がっていく姿が見える。私はまるで仙人を見るような感動を覚えながらそれを見た。七〇歳はゆうに越えると思われるこの老人は、若い日から山を歩き、その鍛錬によってこの体力を維持できているのである。それと比べると私の方は惨憺たる体力であった。乗越の常念小屋の食事は喉を通らず、翌日の常念岳から蝶ヶ岳への縦走はコースタイムの四〜五時間に比べ八時間を要した。

私はその二年後に五〇日間も入院した。入院時は軽い脳梗塞だったが、入院二日目に右足の動脈が詰まり、あわや足を一本失う寸前だった。幸いにして右足切断は免れたが視神経も顔面神経も麻痺していた。そのときは車の運転はもとより再び教壇には立てないかもしれないとさえ思った。

この経験から私はあの老人をめざし、毎朝一時間の散歩と年間二十の山の登頂を自らに課した。一の沢で一瞬のうちにかいま見たあの仙人?がモデルである。

病気という乗越を越えた私はいくらかシンプルになった。そのころ朝の連ドラで「生きているだけで丸儲け」いうセリフを聞き感動したが、退院後数ヶ月で奥穂高岳をめざしたときは最高だった。まさに「丸儲け」、生きているだけでも幸せなのに、ここまで来ることができるとは…。病気という、人生の一つの乗越を越えたからこそ味わえる感動であった。

あれから八年、私には再び健康と、**●●●●●** 人生の乗越を前に喘ぐ教師の杖となる仕事を与えられた。「人生の乗越」の言葉をあえてここで用いるのは、私の実感としても「危機はチャンスだ」からだ。

私の心象風景を少し告白するなら、私はつらい話を聴きながら、しばしば乗越をめざし喘ぐ自分の姿を思い描いていることがある。そしてこの人が乗越に立つときに見る黄金の額縁に入った奥深い風景を夢想している。：けれども、その密かな楽しみを言葉にすることはできない。そんなことは私の心の中に生じていることに過ぎないし、今喘いでいる人には何の意味もないだろうから。

今はただその苦しみを凌ぎながら登るしかないのだろう。私は楽観的な一本の杖でしかなく、乗越に向かう人の自力を信じるだけが取り柄である。

二〇〇六年三月

